

## 《各受賞者の受賞理由・略歴》

大阪文化祭賞最優秀賞 1件

小栗まち絵

### いずみシンフォニエッタ大阪 第37回定期演奏会における演奏

(おぐりまちえ/いずみしんぷおにえったおおさか だい37かいていきえんそうかいにおけるえんそう)

(第3部門：洋舞・洋楽)

バイオリニスト、小栗まち絵が自らコンサートミストレスを務める「いずみシンフォニエッタ大阪」の定期演奏会で、ソリストとして登場した。演奏したのはジャック・ボディの「ミケランジェロによる瞑想曲」(2007年、オリジナル版による日本初演)で、イタリア・ルネサンス期を代表する芸術家、ミケランジェロのソネットを題材にとった現代曲。決して派手なソロ部分があるわけでもなく、ともすれば断片的に演奏されてしまうこともあるだろうが、小栗はその豊穡なバイオリンの音色、歌心に満ちたフレージング、そして精神性や感情を音楽として伝える強烈な集中力でもって、時代を問わない音楽の普遍的な美しさと緊張感、親密性を会場に呼び覚まし、現代とルネサンス期をつなげて深い感動をもたらした。あらゆる曲に新たな命を吹き込むことのできる、たぐい稀なる感性を持ったバイオリニストとしてあらためてたたえたい。

また、彼女は日本屈指の指導者としても著名。夫の故・工藤千博とともに大阪から国内外で活躍するバイオリニストを多く育てた。今年、30年以上務めた相愛大学を定年になるが、長年、この大阪で音楽教育に尽くした功績についても合わせて評価したい。



【略歴】大阪生まれ。相愛音楽教室、桐朋学園高校音楽科を経て、1971年桐朋学園大学卒業。インディアナ大学アーティストディプロマ課程修了。ヴァイオリンを東儀祐二、江藤俊哉、ジョセフ・ギンゴールド、フランコ・グリの各氏に師事。室内楽を斎藤秀雄、ロバート・マン、メナム・プレスラーの各氏に学ぶ。1968年日本音楽コンクール第1位、1972年ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール特別賞、1976年エヴィアン(現・ポルドー)国際室内楽コンクール第1位大賞受賞。1974-1986年インターナショナル弦楽四重奏団のメンバーとして欧米を中心に活動。インディアナ大学助教授、ブラウン大学アーティスト・イン・レジデンスを歴任。1986年帰国。日本音楽コンクール、ABC新人コンサートオーディション、宗次エンジェルヴァイオリンコンクール等の審査員を務める。バッハから邦人の現代作品まで幅広く取り組み、ソロ、室内楽、オーケストラリーダーとしての活躍、及び教育者としての功績に対して2004年度エクソンモービル音楽賞、2007年度大阪芸術賞特別賞、2009年度大阪市民表彰(文化功労部門)受賞。現在、いずみシンフォニエッタ大阪コンサート・ミストレス、サイトウ・キネン・オーケストラのメンバー、相愛大学教授、東京音楽大学特任教授。

## 大阪文化祭賞優秀賞 2件

### 「妹背山婦女庭訓」出演者一同

### 四月文楽公演 通し狂言「妹背山婦女庭訓」の舞台成果

(「いもせやまおんなていきん」しゅつえんしゃいちどう/しがつぶんらくこうえん とおしきょうげん「いもせやまおんなていきん」のぶたいせいか)

(第1部門：伝統芸能・邦舞・邦楽)

文楽屈指の時代物の大曲「妹背山婦女庭訓」の通し上演を、人形浄瑠璃文楽座の総力をあげて取り組み、文楽の本質である人間の情を迫力たっぷりに描き上げ、深い感動を与えた。現在、世代交代のまっただなかにある文楽にとって、同曲の通し上演は試金石ともいえるものだったが、ベテランから中堅、若手にいたるまで、太夫、三味線、人形遣いの三業の出演者全員が一体となり、鬼気迫る意気込みで大曲に立ち向かった。なかでも、太夫と三味線が舞台上手と下手の床に分かれて語る「妹山背山の段」は、近年では人間国宝の大ベテランの太夫がつとめていたが、今回は、五十歳代の竹本千歳太夫と豊竹呂勢太夫に一挙に若返り、人間国宝の三味線、鶴澤清治に牽引され、命がけとも思える語りを披露。この段の世界観をスケール豊かに造形し、抜擢に応えたことは特筆に値する。文楽の未来を占う上でも大きな成果を上げたことを評価したい。



【略歴】人形浄瑠璃文楽座は「人形浄瑠璃文楽」を後世に継承し、発展させることを目的としている。平成20年にユネスコにより「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載され、その芸術性の高さは世界に認められている。現在、技芸員は、太夫20名、三味線21名、人形41名、合計82名で構成され、大阪の国立文楽劇場で年4回の本公演と文楽鑑賞教室公演を、また東京国立劇場小劇場で年4回の本公演他をそれぞれ実施している。その他に、春秋の地方公演のほか、小公演を各地で開催し、文楽の普及に努めている。

## MONO

### 「裸に勾玉」の舞台成果

(もの/「はだかにまがたま」のぶたいせいか)

(第2部門：現代演劇・大衆芸能)

関西発の劇団として全国的に活躍するMONO。旗揚げ以来ずっと京都に拠点を置いているが、新作公演の多くを大阪で行ってきた。

「裸に勾玉」の舞台は弥生時代。邪馬台国と敵対している狗奴国のある集落に、現代人がタイムスリップする。そこには争い、嫉妬、いじめ、許しなど現代社会と同じ構図があった。現代人は最初こそ混乱するものの、弥生人と共にこれらの問題に向き合っていく。

啓蒙的なせりふを使わず、弥生時代を舞台に今日的なテーマを示した作・演出の土田英生の視点は秀逸で、独自性がある。俳優陣のアンサンブルも豊か。弥生人の独特な言葉は現代日本語とは少し違うが、意味はじゅうぶん理解できる。単なるタイムスリップものではない、ユーモアを交えた上質な会話劇に仕上げた。また、弥生人の衣装や高床式倉庫・竪穴式住居の美術等、スタッフワークも優れ、総合的に高い成果をあげた。今後も演劇界を牽引する存在として力を発揮してほしい。



【略歴】平成元年、立命館大学の学生劇団OBを中心に「B級プラクティス」という名称で結成。平成3年「MONO」に改名。代表土田英生が作・演出を担当する。日常にありそうでない設定の中で、まるで隣にいるかのような市井の人々がコンプレックスを抱えながら生き、些細な意見の違いで人と人が対立する。笑いを交えた会話の中から、時には個人的な、時には社会的な問題が浮かび上がる。戦場慰問から逃げ出した芸人たちを題材にした『その鉄塔に男たちがいるという』が平成11年第6回OMS戯曲賞大賞を受賞。会話の間と呼吸で作上げる独特なアンサンブルが高く評価され、平成21年アントン・チーホフ初期の短編集をモチーフとした『チーホフを待ちながら』が第64回文化庁芸術祭優秀賞を受賞。平成29年3月に新作『ハテノウタ』を大阪、北九州、四日市、東京にて上演予定。